

豊蔵の世界 vol.2

〜エピソードとともに〜



瀬戸黒茶碗 昭和8年 荒川豊蔵作

荒川豊蔵資料館では、自伝「縁に随う」に登場する作品を中心に、「エピソード」を添えて収蔵作品を展示します。今回は、初窯での困難な状況など、作品を生み出した背景を紹介します。

初窯の瀬戸黒

昭和5年4月、荒川豊蔵は久々利大萱の牟田洞で古志野の筒絵陶片を発見します。その後、東濃地方の古窯跡の調査を行っていくうちに、志野復興への思いを募らせていきます。

昭和7年7月、牟田洞に陶房を造り始め、長男の武夫と作陶生活を始めました。昭和8年12月、いよいよ初窯に火入れをします。

〔略〕窯は陶房向かいの山上に築く。桃山期美濃窯の作りである。(略)冬十二月初窯を迎える。(略)これは初めて焚く窯である。どの程度燃すと火勢がどうなり、温度がどこまで上がるか、さっぱりわからなく。(略)息子が大声上げて部屋に入ってきて「瀬戸黒が焼けた」と見せに来たものである。(略)三晩四日焚き、結果は失敗であった。(略)「荒川豊蔵著「縁に随う」日本経済新聞社、1977)」

豊蔵がこの時造った窯は、桃山時代に造られた大窯を再現した半地上式の窯



自伝「縁に随う」

でした。初めてのことで、火の勢いや温度の管理については、思うようにならなかったようです。3日目に入り、火入れの前に居続ける意識がなくなり、倒れてしまいました。その後も意識混濁の状態がしばらく続くほどだったといわれています。一方、武夫は豊蔵に焼けた品を見せた。「一心で窯を焚き続けました。この親子の情熱により造られた作品が写真の瀬戸黒です。」

「温度が上がらず失敗に終わった初窯だった」と、豊蔵自身は振り返っています。しかし、この失敗が起点となり、この後2年に及ぶ試行錯誤につながっていきます。昭和10年、豊蔵は親交のあった北大路魯山人に自分の作品を見せたところ、よい評価を得られ、自信がついたといわれています。

その後も、豊蔵は研究を重ね、作陶に人生を捧げ、志野と瀬戸黒の重要無形文化財技術保持者(いわゆる人間国宝)に認定されることも、文化勲章の受章へとつながっていきます。

織部鷺絵鉢

左の鉢は、昭和8年魯山人からの依頼で、星岡茶寮の名物であった大きい豆腐を2丁入れるために制作されました。

大萱の豊蔵の窯では、織部を焼くには適さなかったため、多治見の友人の窯で焼きました。

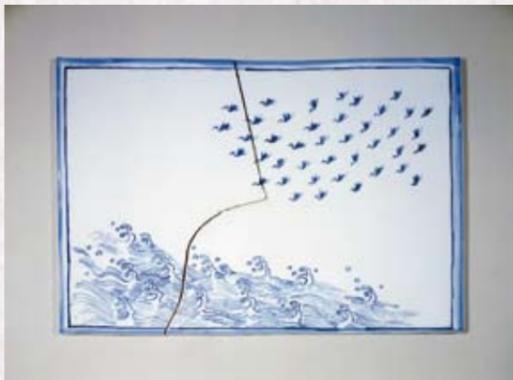
この前年、豊蔵は星岡窯を去ることになりましたが、魯山人の美意識や料理と食器への強いこだわりには一目を置いていたため、生涯付き合えたといわれています。



織部鷺絵鉢

トルエドソン夫人の陶板

トルエドソンは、スウェーデンの商社の東京支配人であり、日瑞協会名誉



染付波に千鳥図陶板

理事として、夫妻で日本とスウェーデンの交流の世話役を務めていました。

トルエドソン夫人は、日本美術の愛好家であり、また豊蔵のよき支援者でもありました。戦時中は、一時帰国したものの、戦後再来日し、豊蔵との交流は続きました。

右の写真は、昭和21年頃、瀬戸市へ夫人を伴い、豊蔵が制作した陶板です。窯の中で破損したものを豊蔵が持ち、うまく焼けたものを夫人が本国に持ち帰りました。

その後、孫娘のアニカが交換留学生として来日した際、美濃焼や志野をもっと勉強したいとの意向であったため、滞在延長の希望を支援します。これで夫人への恩返しできた豊蔵は振り返っています。

志野茶碗 銘「早春」

今月号の表紙を飾った志野茶碗銘「早春」。豊蔵が好んだ志野茶碗の文様のひとつに、藤絵があります。この作品は、高根(土岐市)の土で作られたといわれています。火色が美しく、半筒の形をしています。昭和55年の「縁に随う 荒川豊蔵展」では、「無心」といつ銘で出品されていましたが、故あって再び豊蔵の手元に戻り、「早春」とつけられました。

備前耳付花入

昭和19年、豊蔵は、備前(岡山県)の陶芸家・金重陶陽方へ約1週間滞在しました。戦時下であったため、夜は暗がりの中で、歓談したと記されています。滞在中には、徳利、水指、鉢などを制作しましたが、そのうちのひとつが左の備前耳付花入です。

豊蔵は、全国各地の陶芸家と交流を持ち、そこで得た刺激を自身の作品に取り込んでいきました。



備前耳付花入

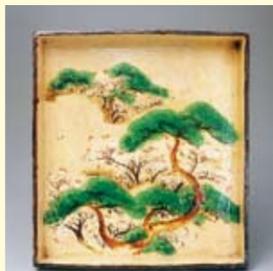
荒川豊蔵資料館

「豊蔵の世界 vol.2

〜エピソードとともに〜

期間 2月の6日(金)〜4月12日(日)
 休館日 月〜木曜日(祝日を除く)
 時間 午前10時〜午後3時30分(4月3日から午後4時まで開館)
 入館料 一般200円 高校生以下無料 共通券300円(可児郷土歴史館 兼山歴史民俗資料館・荒川豊蔵資料館の3つを館へ入ります)

季節を楽しむ月替わりの展示も見どころの一つです。



吉野山の絵四方飾皿(4月)



紅白椿絵鉢(2月)

問合せ先 可児郷土歴史館
 ☎0211